糸をつむぐ

糸取り　球磨郡免田町（現あさぎり町）　1982年　平川大五郎撮影

繭は約１ｋｍの一本の糸をセシリンというタンパク質で固めてつくられています。繭から糸を取るにはまず、お湯で繭を煮てセシリンを溶かしてやります。繭が柔らかくなり鍋の表面に浮き上がってきたら、わらなどを束ねた小さい箒（ほうき）で突いて糸口を取り出し、これを数本あわせ、片手で撚りをかけながら糸枠に巻き取っていきます。この作業を糸繰り、糸取りといいます。太さが均一になるように撚りをかけるには熟練の技が必要とされました。後に、糸に撚りをかけるのと糸枠へ巻き取るのを同時に行ってくれる座繰（ざぐり）という道具が登場し、作業は楽になりました。

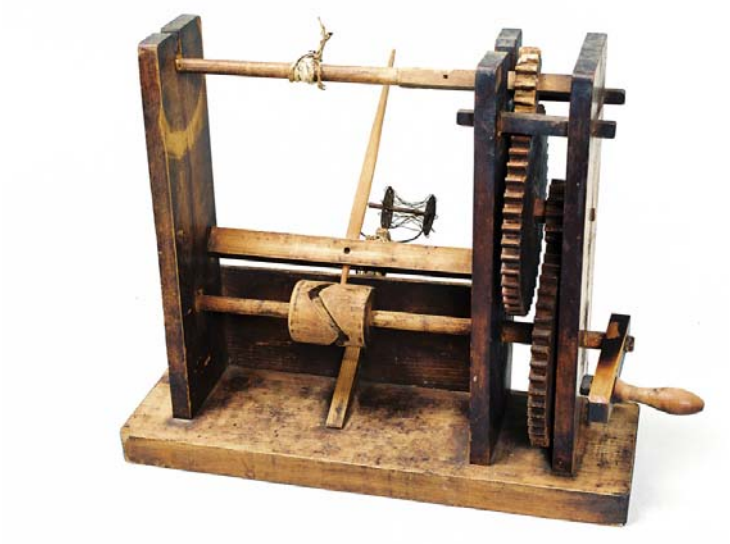
こうしてとれた糸を生糸といいます。これを草木の灰汁や重曹で煮てセシリンを完全に落とすと、ようやくしなやかで光沢のある絹糸となります。

木綿は春から初夏に種を蒔き、秋に白くはじけた実を収穫します。これを乾燥させたら、綿繰りといって種を取り除く作業を行い、さらに綿打ちといって専用の弓で弾いてほぐしふわっとさせます。これを少量ちぎって薄く広げ、棒に巻き取って細長い筒状にします。この筒の先を少し引き出して糸車のツムにかけて糸車を回すと、綿が少しずつ引き出され、撚りがかけられて糸が紡がれていきます。一定の太さに糸を紡ぐには糸車を回す速さや綿を引く手の動かし方を調節するなど熟練の技が必要でした。

繭の糸取り道具

（まゆのいととりどうぐ）

繭から糸を取るときに使う道具です。糸取り鍋、繭をすくう金網、繭の糸口を探す口立箒、取り出した糸をかけて座繰（ざぐり）に送る滑車、くず糸を巻き取る竹です。



座　繰（ざぐり）

糸を紡ぐ道具です。ハンドルを回すと歯車が連動して糸枠がまわり糸を巻き取ります。同時に竹のへらが左右に振って糸を枠全体に均一に送ります。へらの下には糸に撚りをかける鼓状の器具がついています。

牛　首（うしくび）

紡いだ糸を糸枠に巻き取ったり、糸を巻いた枠を取り付けて糸車に送ったりするのに使われたものです。中央の支柱上部に牛の角のように突き刺した腕木に糸枠を取り付けます。

糸　　車（いとぐるま）

糸車は機織りに使う緯糸（よこいと）を細管に巻き取ったり、糸に撚りをかけたり、木綿を紡いだりなど、糸に関する様々な用途に使われました。

真 綿 枠（まわたわく）

穴のあいた繭や、二匹が一緒に繭を作ったものなど糸にできない繭は、煮て柔らかくしてこの枠で薄く引き延ばして真綿にしました。軽くて暖かい真綿は冬の着物や蒲団の中綿などに利用されました。

草木染めと藍染め

洋服やハンカチ、カーテンなど、私たちのまわりにはいろんな色の布があります。それらの糸や布に色をつけるのに、今は主に石炭や石油から作られた化学染料が使われています。しかし、昔の人たちは身近にあるいろいろな木や草、花などから作った天然染料で染める「草木染め」をしていました。

染料とした植物は赤色に紅花、アカネ、黄色にカヤ、キハダ、クチナシ、ウコン、茶色に柿、ドングリなどが主に使われました。ほかにも山桃や桐、梅、ヨモギなどさまざまな植物で糸や布を染めることができます。

布を青く染めるには藍という植物が使われました。藍染めはわが国では今から1500年ほど前から行われていましたが、特に江戸時代に木綿の着物が庶民に広まると、木綿を染めやすい、布を丈夫にする、臭いに虫除け効果がある、汚れても目立ちにくいなどの理由で、普段の着物のほか野良着、前掛け、手拭い、のれんなどさまざまな糸や布を染めるのに使われました。明治のはじめころ、日本に来た外国人は日本の藍染めの着物の美しさにとても驚いたそうです。そこから日本の藍染めの色は「ジャパンブルー」とよばれるようになりました。

藍染めが広まると、青色の濃淡や他の色と組合せて様々な縞模様の着物が作られるようになり、性別や年齢にあわせて楽しむようになりました。機織りをする女性たちは競って美しい模様の布を織るようになりました。

綿　打　弓（わたうちゆみ）

綿の繊維をほぐして柔らかくふっくらとさせる「綿打ち」を行う道具です。弓の中央を弾力性のあるもので吊り、片手で弓を押さえて弦に綿を絡ませ、槌で弦を弾き、振動で綿をほぐしました。

実　繰（さねくり）

綿の実を種と綿毛に分ける道具です。ローラーの間に綿の実を挟みハンドルを回すと、綿毛は先に送られ、種は手前に落ちます。手で種を引きはがすのが大変だったため、このような道具が発明されました。

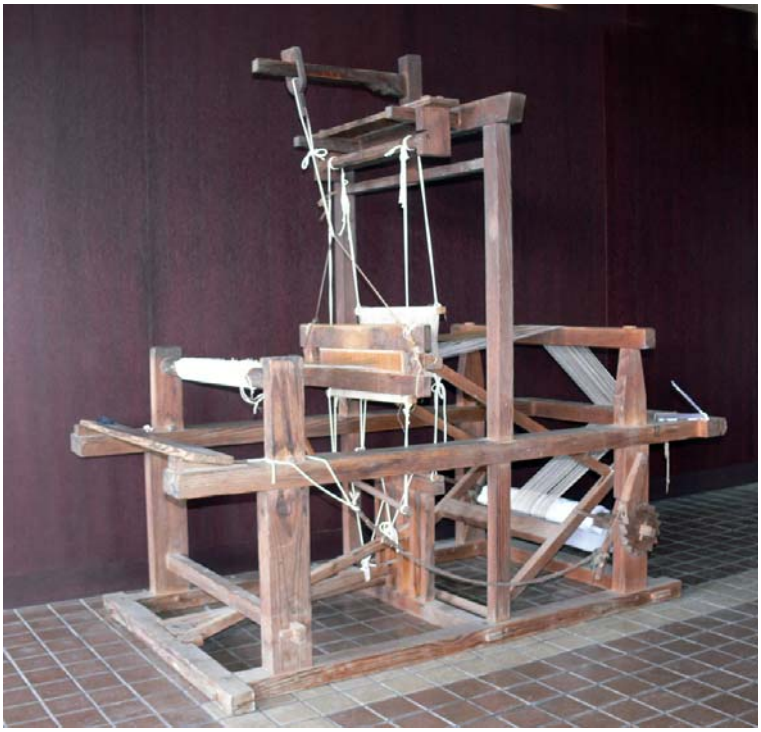
綜　　割（ふわり）

綛（かせ）にした糸をかけて回し、ほかの糸枠や管に巻き移す道具です。綛とは糸を整理するために一定の寸法に糸を巻き取って輪にしたものです。

肥後絣縞帳
（ひごがすりしまちょう）

縞柄の織物の端布をいくつも束ねて帳面状にしたものです。紺屋・呉服店などが注文を受ける時の見本としたもので、これは昭和３０年代に川尻の染め物店で使われていたものです。

（熊本県伝統工芸館所蔵）



機（はた）

布を織る機械です。経巻（たてまき）、布巻、綜絖（そうこう）、踏木、杼（ひ）、筬（おさ）が主要な部具です。経巻は経糸を巻いておき適宜送り出す部分です。ここから経糸は織り上がった布を巻き取る布巻まで張られます。綜絖は経糸の間に緯糸（よこいと）を通す道を作る仕組みで、ひもで連結された踏木を足で踏んで上げ下げします。一般的な平織物は綜絖を二枚、踏木も二本使用しますが、複雑な織物になるほど使用する綜絖と踏木の数が増えます。綜絖によって作られた経糸の間に杼で緯糸を通します。杼は中央に緯糸を巻いた管を入れた舟形の器具で、走りを良くするために車がついています。筬は通した緯糸を打ち込む仕組みです。細く割った竹籤の間に経糸を通し、筬の手前で緯糸を通し、筬を打ち付けて糸を詰めて布にしていきます。織る布によって竹籤の本数の異なる筬を使用します。

機織りと着物のリサイクル

昔の農家では多くの家に機織り機があり、家族の着物をつくる布は自分たちで織っていました。機織りは女の人の大切な仕事のひとつでした。

機織りをするにはまず大量の糸が必要です。糸は買ってくることもありましたが、木綿や蚕の繭から自分で糸を紡いで用意することもありました。また、いろんな模様を織るには糸に色や模様を染めておくのですが、この染めを自分でする人もいました。何百本もの経糸（たていと）を一定の長さに揃えて切り、筬（おさ）と綜絖（そうこう）に通して機に取り付けます。緯糸（よこいと）は短い管に巻いて杼（ひ）に取り付けます。このように実際に機織りを開始するまでには様々な根気のいる準備が必要でした。

ところで、一般的な体格の大人の着物には一反（約36cm×10～13m）の布が必要です。これだけ織るのに早くても60時間くらいはかかるといいます。農作業や他の家事の合間に行うと1か月近くかかったそうです。さらにこれだけの布を織るのに木綿なら約675g、繭なら2千個を糸にしなくてはなりません。そう考えると、着物を一枚仕立てるには大変な時間と労力がかかっていることが分かります。そのため昔の人は着物をとても大事に大切に扱っていました。布が傷んできたらほどいて洗ってきれいに仕立て直したり、染め直したり、継ぎを当てたり、刺し子にしたり、きれいな部分だけ子ども用に仕立て直したりして、長く大切に着続けていました。さらに傷んだら蒲団や座布団にしたり、布きれで可愛い細工物を作ったりしました。最後にはおしめや雑巾としてぼろぼろになるまで使い続けられました。

5　田畑で働く

犂で田を耕す　上益城郡山都町　2005年撮影

昔の米作り

●田を耕す

春の始めに田起こしといって、鍬（くわ）や鋤（すき）で田の土を掘り起こします。江戸時代の終わり頃から牛や馬に犂を曳かせて田起こしをするようになりました。田起こしの時には肥料を鋤込みます。肥料には藁（わら）や雑草に人や家畜の糞、竈（かまど）の灰、米のとぎ汁、生ごみ、台所や風呂の水などを発酵させた堆肥や雑草などの緑肥が用いられました。起こした後は土の塊を塊割（くれわり）や馬鍬（まんが）で砕いて細かくします。これを何度か繰り返した後、田に水を張り、鍬で田の周囲の土手に泥を塗って水漏れを防ぎます。次に代掻きといって、牛馬に馬鍬を曳かせて土を細かく砕き、田の表面を平らにする作業を２、３回行います。仕上げに柄振（えぶり）などを使って表面を平らにならしました。

代掻き　阿蘇郡長陽村（現南阿蘇村）　1946年　麦島勝撮影

●苗を作る

稲の苗を育てる場所を苗代と呼びます。種籾（たねもみ）を１週間ほど水に浸け、苗代に蒔き、苗を育てます。良い種籾を選ぶために、水に浸ける前に塩水に浸けて軽い籾を浮き上がらせ、底に沈む良い籾だけ選ぶ塩水選という方法もありました。お米の出来の善し悪しはこの苗の出来で半分は決まるといわれていました。

苗取り　球磨郡球磨村　1998年撮影

●田植え

種蒔きから４０日ほどたった梅雨の頃、田植えを行います。田植えは主に女性の仕事で、田植

えは主に女性の仕事で、田植えをする女性は早乙女と呼ばれていました。昔はだいたいの間隔で植えていましたが、大正時代頃から、正条植えといって、田植綱を張ったり型枠を転がして目印をつけ、苗を一定の間隔で植えるようになりました。

●水田の管理

田植え後しばらくすると雑草が生え出します。草取りは炎天下、腰をかがめて行う重労働でした。昔は手で抜いたり、雁爪を使いましたが、正条植えが行われるようになると、立って草取りが出来る手押しの除草機が発明され作業はいくらか楽になりました。また稲にウンカなどの害虫が付くことがあります。このような時は田に鯨油や石油を注いで油の膜を作り、長い棒や笹で稲の葉を叩き、虫を油に落としました。田の水が不足する時には水車を人が踏んで水を田に入れて管理していました。

●稲刈りと脱穀

稲穂が黄金色に色づき垂れ下がると稲刈りです。昔は草刈りに使うような刃鎌で刈っていましたが、昭和になって鋸のように歯がある鋸鎌（のこぎりがま）が普及しました。刈った稲はその場で竹竿に掛けるなどして干し、乾燥したら籾を落とす脱穀作業を行います。昔は箸で挟んで籾を扱き落としましたが、江戸時代に千歯扱が発明され、大正時代から足踏脱穀機が普及しました。

●籾（もみ）を乾かす

脱穀した籾は家に持ち帰り、篩（ふるい）にかけて大きなごみを除き、箕（み）であおり風の力で軽いごみを飛ばしていました。江戸時代には篩を発展させた万石通や、人工的に風を起こして籾や藁（わら）くずなどをそれぞれの重さごとに選別する唐箕が使われるようになりました。選別した籾はネコブクという大きな藁の敷物に広げ、何回か柄振で混ぜて均一に乾燥させました。この作業をモミアセリといいます。

●籾摺（もみす）り

米は玄米にして貯蔵、出荷されます。籾摺りは籾殻を除いて玄米にする作業です。この作業に使うのが籾摺臼です。木製のものや竹枠に土を詰めて作ったものがあります。籾摺りは人手のいる重労働でしたので、昭和に入ると動力が使われるようになりました。

田植え　菊池郡大津町　1985年　白石巌撮影

稲刈り　1977年　白石巌撮影

掛け干し　阿蘇郡小国町　1964年　白石巌撮影

モミアセリ　菊池郡大津町　19855年　白石巌撮影

鍬　（くわ）

やや曲がった短い柄が刃と鋭角についた形のこの鍬は一般に肥後鍬とよばれ熊本県特有のものです。中腰で作業するため大変ですが、早く能率的に仕事ができました。

鍬　（くわ）

肥後鍬の刃が三つ又になったこの鍬はミツマタクワ、サンボンクワなどと呼ばれ、比較的固い土を耕す時に使われました。また、海岸付近では貝掘りにも利用されていました。

鋤　（すき）

人の力で土を掘り起こす道具です。主に畑で使われました。ヒキテスキなどと呼ばれ、名前の通り引いて使います。

二 段 耕 犂（にだんこうすき）

牛馬に曳かせて田畑を掘り起こす道具です。昭和２２年に熊本市の農機具メーカー東洋社が開発したもので、当時、日本一の犂といわれました。

馬　鍬（まんが）

熊本県ではマガと呼ばれます。田植え前に水を入れた田んぼの中を牛や馬に曳かせて土を細かく砕き、泥をかき混ぜながら平らにならしていくための道具です。

塊　割（くれわり）

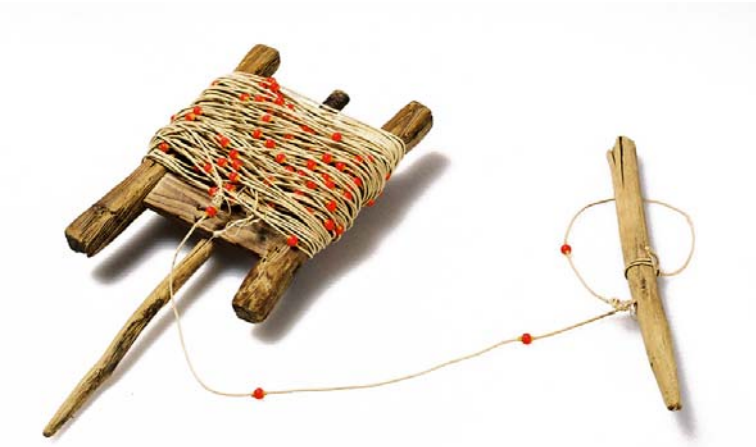
クレとは土の塊のことです。犂で掘り起こした田畑の表面の土の塊をこれで叩き割りました。

田 下 駄（たげた）

湿田で泥に足が取られないように歩いたり、苗代や田植え前の水田に肥料として草や枝を踏み入れたりするために履いた下駄です。

踏　車（ふみぐるま）

用水路から田に水を揚げる道具です。上から人が羽根板を踏んで回転させて水を押し上げます。



田 植 綱（たうえづな）

苗を一定の間隔に植えるための目印を付けた綱です。これを田の縦横に張り、赤い印のところに苗を植えました。

田植定規（たうえじょうぎ）

田植綱を縦横直角に張るための定規です。

肥　桶（こえおけ）

コエタゴともいいます。肥料となるし尿（シモゴエ）を入れて運ぶ容器です。こぼれないように蓋がついています。化学肥料の無かった時代、シモゴエは農家の大切な肥料でした。

雁　爪（がんづめ）

夏の暑い頃、田の雑草取りで使った道具です。これを稲株の周りに打ちこんで土を起こし、草を泥の中に押しこみました。

田 打 車（たうちぐるま）

雁爪による除草は腰を曲げての作業でとてもきついものでした。そこで立ったまま仕事が出来る除草機が考案されました。これもそのひとつです。熊本ではテオシガンズメなどと呼ばれます。

油 差 し（あぶらさし）

ウンカという虫を除去するために、これで田の水面に油を落とし油の膜をつくり、その上に虫を落として殺しました。

蚊　火（かび）

夏場の屋外作業で、蚊やぶよなどが寄ってこないように、火をつけ煙がたつようにして腰に下げていました。

鋸　鎌（のこぎりがま）

鋸のような歯が付いています。繊維が硬い稲を刈るのに適しており、稲刈り専用の鎌として昭和初期に普及しました。

農具の移り変わり

わが国の歴史や文化に深くかかわる稲作ですが、その技術と道具は二千年以上も前に大陸から伝えられました。古代の遺跡からは木製の鍬（くわ）や鋤（すき）、田下駄などが発見されています。

４～５世紀には木製農具の先に鉄刃をつけたものや鉄（からすき）の鎌などが広く使われるようになります。また７世紀には牛馬に曳かせて土を起こす犁が大陸から伝わました。そのほか箕（み）や唐箕（とうみ）、唐棹（からさお）などの農具も大陸から伝えられたといわれています。

一方、国内でもさまざまな農具が生み出されていました。特に江戸時代から明治時代は、国内で多彩な農具が発明され改良された時期です。

江戸時代の元禄から享保年間（1688 ～1736 年）は農家が経済力を持ち、都市部で商業活動が活発となった一方で、農村では労働力不足や労賃高騰などの問題もでてきていました。そこで少ない人手と時間で沢山の仕事が出来るようにと千歯扱き、万石通、足踏み式の水車などの農具が生まれました。また鍬や鋤などもそれぞれの土地条件に合わせて改良されていました。それらは農書などを通じて各地に伝わり広まっていきました。

明治時代になると近代短床犁（たんしょうすき）が開発され普及します。この犁の効能を発揮するために乾田化や区画整理が行われました。また、正条植えが奨励され、そのための農具である田植枠や田植綱などや、株間を押して使う除草機などが開発されました。

いわゆる昔の農具といっても稲作が伝わった頃より使われ続けてきたものもあれば、後に発明、改良されたものなどもありさまざまですが、いずれも基本は人の力で使う道具であるため、使用者が使用の便不便の中で考え、工夫を重ねて作られ、使われてきました。昭和３０年代後半からは農業機械が広く使われるようになりました。機械は高性能で汎用性にすぐれるため、作物の種類や土壌、作業工程などによって細かく使い分けていたこれまでの農具の多くが使われなくなり、また除草剤の開発によって除草の道具も使われなくなりました。このように短期間で多くの農具が使われなくなるような変化はこれまでにないものでした。

鎌（がま）

コガマともいいます。稲や麦を刈りとるための鎌ですが、草刈りにも使いました。刃が細くて軽いのが特徴です。

千歯扱き（せんばこき）

櫛のようになった歯の間に稲や麦の穂を差し込み、手前に引いて籾を落とします。江戸時代に発明された道具です。

足踏脱穀機（あしぶみだっこくき）

踏み板を踏むと鉄歯のついたドラムが回転します。これに稲穂を打ち付けてモミを落とします。大正時代に発明されました。

唐　棹（からさお）

穀物や豆類の脱粒、脱穀を行う道具です。柄を振って先端の棒を回転させながら打ち付けます。熊本ではブリ、ビャー、メグリボウなどと呼ばれます。

鬼　歯（おんば）

木槌のように叩いて穀物や豆類の脱粒、脱穀を行う道具です。叩く面にギザギザの歯をつけていることが名前の由来です。県内では主に天草地方と芦北地方で使われていました。

箕（み）

脱穀、脱粒した後、実とゴミを分けるときなどに使いました。両手でふちをもってあおり、殻やごみなど軽いものを風で飛ばします。

唐　箕（とうみ）

箕の作業をもっと楽にしようと発明された道具です。ハンドルを回して中の羽根板を回転させ、人工的に風をおこすことができます。中国から伝わったともいわれます。

柄　振（えぶり）

モミアセリともいいます。脱穀した籾を天気の良い日にネコブクという大きな敷物の上に広げ、この道具で混ぜてまんべんなく干しました。

篩（ふるい）

脱穀、脱粒した後、実とゴミを分けるのに使いました。篩は目の大きさによって粟用、大豆用などいろいろ使い分けていました。

万石通（まんごくとおし）

篩を発展させたものです。網目より小さい米を下に落とし、玄米の品質をととのえました。江戸時代に発明された道具です。

6 山で働く

●木を切る

チェーンソーが登場する昭和３０年代までは斧と鋸で木を切り倒していました。木の高さ、枝張り、地形などから切り倒す向きを決め、倒す方に斧で三角の切り込みを入れます。次に反対側から斧や鋸を入れ切り倒します。鋸で切るときは木の重みで鋸が動かなくなるのを防ぐため矢を打ち込みました。

切り倒したら鉈などで枝を落とし、必要に応じてタマギリといって寸法に合わせて切り分けます。

●木を運ぶ

山から木を降ろすには、そのまま斜面を滑らせ、谷川に流すことが多かったのですが、川がなければ、切り口に鐶（かん）を打ち込み、綱を付けて人や牛馬が引っ張ったり、木馬と呼ばれるそりに積んで、丸太を並べた道を作り滑らせたりしました。丸太を転がしたり、少し動かす時には、鳶口（とびぐち）や鉤（つる）、万力爪（まんりきづめ）を使いました。

●板にする

丸太のまま使うものもありますが、多くは角材や板に加工されます。皮剥で木の皮をはぎ取ったら墨打ちといってどのように切り分けるか墨糸で線を引き、大鋸（おが）という大きな鋸で縦に挽き切り、斧や鉈（なた）、手斧（ちょうな）で削って仕上げます。熟練の技が必要でした。

●木を育てる

植林にはスギやヒノキ等の針葉樹が用いられます。３月から４月頃、植林する場所の雑木や雑草を払い、山鍬で土を起こし苗を植えます。背の低い内は雑草に覆われないよう鎌で雑草の下刈りをします。

木がある程度生長したら、日当たりと風通しを良くするために、枝打ちといって下枝を落とします。１０年目と２０年目に生長の良くない木を間伐します。スギは植えてから材木として切るまで３０年以上かかります。真っ直ぐに育った美しい木を作るためには大変な労力が必要です。

切　斧（きりよき）

木を切り倒す時に使われる斧です。まず切り倒したい方の根本にこの斧で切り込みを入れ、反対側からこの斧または山鋸で切り込んで倒しました。

山　鋸（やまのこ）

木を切り倒したり、タマギリの時など山仕事で用いられる鋸です。これで直径四尺（約120cm）の木まで切ることができます。

改良鋸（かいりょうのこ）

従来の山鋸は木を切る時、おがくずで目詰まりしやすかったので、歯の間に大きなすき間を入れて、おがくずが排出されやすいように改良された鋸です。

矢（や）

木を切る時に切り口に打ち込んで、切り倒す方向を調節したり、鋸を挽きやすいようにすき間をつくったりする道具です。

鉈（なた）

切った木の枝を落としたり、植林した木の手入れで余分な枝を落とす枝打ちの他、藪（やぶ）を払ったり、小木や竹を伐ったりと、山仕事で幅広く使われていました。

鐶（かん）

切り倒した木材を山から引き下ろす時など、長距離を移動させる時に、木材に楔（くさび）部分を打ち込んで固定し、輪部分に綱などをつけて引いて運びましたす。

鉤（つる）

丸太を動かすときに、この道具の金具の先端に丸太の下に差し込み枕木を当て、梃子にして木を転がしました。土佐（高知県）で生まれた道具で土佐鉤とも呼ばれます。

鳶口（とびぐち）

丸太を動かすときに、この道具の金具先端を木材に打ち込んで引いたり、先端を木下に差し込み梃子にして木材を転がしたりして運びました。

万力爪（まんりきづめ）

丸太を動かすときに、鉤（かぎ）状の刃先を木を打ち込み、鉄輪に硬い棒を入れ、梃子の要領で浮かせて転がしました。

皮剥（かわむき）

カワハギともいいます。切り倒した木の樹皮をはぎ取る道具です。貯木するとき樹皮がついたままではしめりやすく、虫が発生し木を傷めるので皮を剥きました。

皮剥（かわむき）

カワハギともいいます。杉や檜の皮は屋根や壁の材料となっていました。樹皮を材料として採る場合はこのようなへらを差し込んで、大きくきれいに樹皮を剥きました。

削斧（はつりよき）

山から切り出した木を製材して角材を作るとき、平面になるように削る斧です。

植林のこと

森林面積の広い我が国にはさまざまな樹木がありますが、とくにスギ・ヒノキは建築用材として、また、松は燃料として古くから利用されていました。

初めの頃は、天然林の中から必要な樹木を探して伐採し利用していました。しかし、建築材、燃料のほぼ全てを樹木に頼っていたわが国では中世には森林資源が不足してきました。そこで江戸時代になると全国各地で植林が行われるようになります。

木材の運搬に水運を主に利用していたことから、特に大きな河川の中上流域に林業が発展していきました。その中でも大和（現奈良県）の吉野川上流域や、信州（現長野県）の木曽川上流域、紀州（現和歌山県）、土佐（現高知県）などは林業の先進地でした。明治時代以降になると、これらの地域の技術者たちが全国へ渡り、また全国からこれらの地へ技術を学びに訪れるようになり、技術が全国へ広まり林業が発展していきました。

第二次世界大戦後、木材需要が急増したこともあり、昭和30年代から40年代に拡大造林といって全国の山で大規模な植林が行われ、やがて林野の四割が人工林という世界有数の水準にまで達しました。

しかし、拡大造林の頃に植林された山はもう伐採期に入っていますが荒れたまま放置されているところも少なくありません。それは安い輸入材により林業経営が苦しくなり、山を離れる人も増え、山村の過疎化、高齢化が急速に進んだためです。スギやヒノキなどの針葉樹はもともと根張りが弱いのですが、間伐や枝打ちなど山の手入れが十分行われていない森は地面に日が当たらず下草も生えないため、更に保水力が低下しています。このことは、斜面の崩壊や水の涵養力低下などの一因とも考えられています。また、大きく育ったスギやヒノキからは毎年大量の花粉の飛ばし、アレルギーの原因となっています。私たちひとりひとりが身近な環境問題として山の環境を考える時代となっています。

大鋸（おが）

板を切り出すために、丸太を縦に切る鋸（のこぎり）です。ワキノコ、コビキノコなどとも呼ばれます。鋸を挽いて出る木くずをオガクズというのはここからきています。

手斧（ちょうな）

山から切り出した木を製材して角材を作るとき、削斧（はつりよき）である程度平らに削った後の仕上げをこれで行いました。

鎌（かま）

草刈り用の鎌です。杉などの苗木を植えてすぐの頃は、下草刈りといって、苗木が周辺の草に埋もれてしまわないように、定期的な草刈りが必要です。

造林鎌（ぞうりんがま）

林業専用につくられた鎌です。普通の草刈り鎌より刃が厚く、下草を刈るほか、細い木や枝を切り払うこともできます。

7 海や川で働く

大漁で賑わう港　飽託郡河内芳野村（現熊本市）　1964年　白石巌撮影

四方を海に囲まれ、多くの河川が流れる我が国では、魚や貝は重要なタンパク源として古くから利用されてきました。縄文時代の遺跡からは石や骨角で作った釣針が見つかっています。また、古代の文献には葛で編んだ網で魚を捕っていたことが記されています。

漁は自然を相手とするものなので、漁師は経験や観察から多くの知恵を貯え、潮の動きや生き物の習性を巧みに利用して、狙った獲物を効率よく捕らえられるよう、道具や漁法の改良を重ねてきました。そのため日本全国には何百種類もの漁法があります。漁具を用いず魚をつかみ取る素朴なものから、ホコやヤスで突く方法、竹で作った籠（かご）を被せて捕る方法、ウナギやタコなど穴に隠れる獲物を鉤で引っかける方法、餌を入れた籠や筌（うけ）を沈めておく方法、海岸に石垣を築き干潮時に取り残された魚を捕る石干見漁（いしびみりょう）など数えだしたらきりがありません。このようなさまざまな漁法の中で中心となるのは釣漁（つりりょう）と網漁（あみりょう）です。しかし、一口に釣漁と言っても疑似餌を使うものやアユのように囮を使うものもあり、またカツオのように竿で一本釣りするものからマグロのように何百メートルもの縄に多数の釣針をつけて漁船で流すものまでさまざまなものがあります。網漁もまた、一人でも出来る投網や四手網、船と多数の人が必要な地引き網、網を海の中に張っておいて獲物が入るのを待つ建網、船団を組んで行う八田網（はったあみ）などさまざまなものがあります。

明治２３年に出版された「熊本県漁業誌」にはその頃、釣漁で２０種、網漁で５８種、その他の漁法を入れると１００種類以上の漁法が紹介されています。

しかし、戦後の技術革新により漁のあり方が大きく変わりました。特に、船の大型化や動力化が進んだこと、麻などを使っていた網が丈夫な化学繊維で大きな網に変わったこと、魚群探知機によって勘や経験に頼らずに獲物を探し出せるようになったことなどが大きな変化です。これらの技術革新は一時的には漁獲の増大をもたらしましたが、海の環境の悪化とあいまって漁業資源の枯渇という問題を引き起こしました。その後、漁業は捕る漁業から育てる漁業へと変革しました。

魚伏籠（うおふせかご）

川や池、干潟などで、魚がいる場所に被せて、上部の口から手を入れてつかみ取る道具です。この籠を県内ではウザといい、漁法はウザ突きなどと呼ばれます。

筌（うけ）

県内ではガネテゴなどと呼ばれる川蟹を捕る道具です。籠の中に小魚の頭などの餌を入れて一晩川に沈めておきます。餌を食べに入った蟹が出られないようになっています。

筌（うけ）

川でウナギを捕る道具で、県内ではウナギテボなどと呼ばれます。中に餌を入れて川に仕掛けます。円錐状のカエシによって、中に入ったウナギが出られない仕組みになっています。

鰻掻（うなぎかき）

川の下流域から海岸近くの海で、川岸や石垣、干潟の泥の中などにいるウナギを引っかけて捕る道具です。

やす

魚を突いて捕る道具です。夜間に明かりを持って川や海にいき、眠ったようにじっとしている魚を突き捕るヨギリなども盛んでした。

鋤簾（じょれん）

干潟のハマグリ・アサリを掘り捕る道具です。ベルトを腰に巻いて鎖で籠とつなぎ、棒を肩に担いで後ろ向きに引きます。この漁法は県内ではヨイショ漁と呼ばれ、緑川河口付近で行われています。

さで網（さであみ）

木の枝を曲げた枠に網を張ったものです。タビ、タブなどと呼ばれます。これで川や井手などで魚をすくいとっていました。

魚籠（びく）

捕った魚を入れる籠です。魚が弱らないように、長い紐をつけて水に沈めていました。

糸巻（いとまき）

釣糸を巻きつけておく枠です。枠が回転するよう工夫されています。一本の糸と針で行う一本釣りは太古から行われてきた漁法です。単純なだけに、熟練を要します。

蛸壺（たこつぼ）

タコが穴の中に潜む習性を利用したもので、この壺を数日海に沈め、中に入っているタコを捕ります。小型のタコを捕るには貝殻なども利用されます。

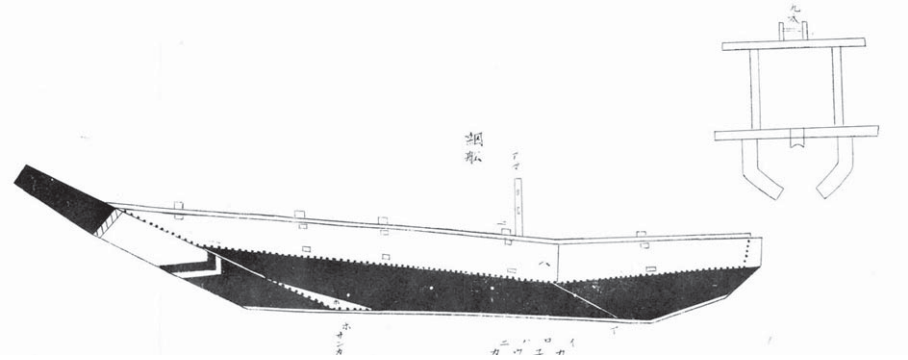
漁船のこと

沿岸漁業の主な漁法は江戸時代の末までに開発され漁法としてはすでに完成期を迎えています。しかし、明治初期ごろには当時の低い技術水準のもとでは漁業生産量の伸び悩み、頭打ち状態に入ってきていたとみられます。そこで明治時代は更に新しい漁業技術の模索を最大の課題にしていました。方向としてはより広い漁場をより高能率に利用できる、沖合操業の方向が目指されました。そのためには漁船の改良が不可欠となります。

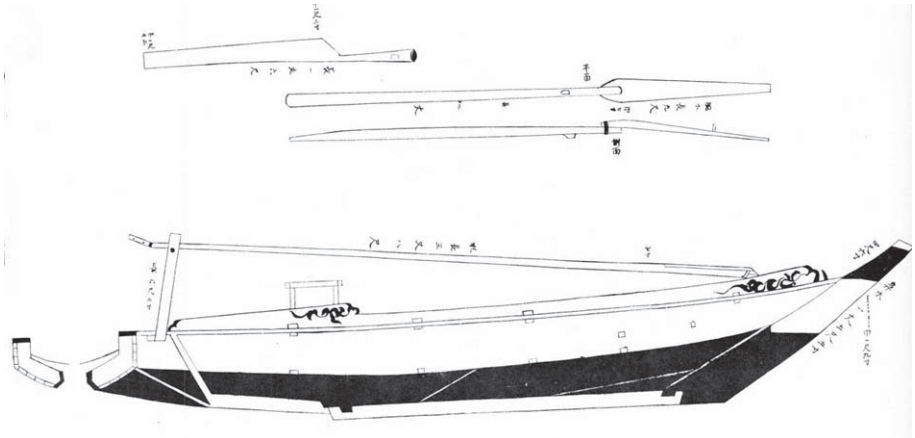
ところで、船の作り方が西洋と日本では大きく異なっています。キール（竜骨）を背骨にして人間の骨格のように肋骨（ろっこつ）を組み、外板をはり付ける西洋式の船に対して、丸木船から発展した和船(日本の在来技術で造られた船）には、基本的に骨組みがありません。カワラと呼ばれる底板に数枚の板を曲げてつなぎ合わせ、横方向に固定するのが特徴です。

明治中期には、政府は漁船改良の方法として、在来の漁船の中でとくに優良なものを発見し、それを全国に普及させ、また西洋型漁船の長所を採り入れた改良なども考えていたようです。熊本県では明治23年に「熊本県漁業誌」を編纂していますが、その中で堅牢(けんろう)かつ軽捷(けいしょう)で遠洋の波濤(はとう)に耐え安全に操業できる船として富岡町(現苓北町富岡)の八田網(はった)船(あみ)、牛深村(現天草市牛深町）の鰹釣船、二江村(現天草市五和町）の潜漁船の三種をあげています。

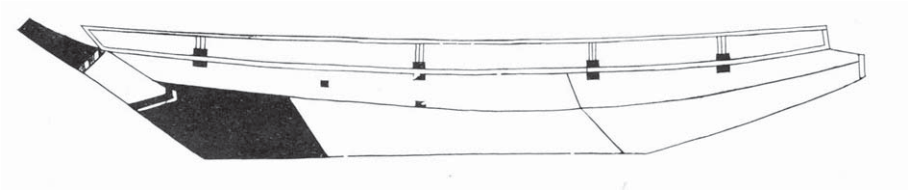
昭和30年代にFRP（繊維強化プラスチック）船が登場します。軽く、堅牢で安価なFRPの利用は戦後の船材革命ともいわれ、従来の木造漁船は急速に減少し、近頃ではほとんど目にすることがなくなりました。



富岡の八田網船
総長　4丈5尺5寸(約13m80cm)



牛深の鰹釣船
総長　4丈2尺9寸
(約13mcm)



二江の潜漁船

餌木（えぎ）

イカ釣りに用いられる、魚やエビの形をした木製の疑似餌です。素材や色、形にさまざまな工夫をこらして手作りされていました。

擬餌鉤（ぎじばり）

カツオ一本釣り用の擬餌鉤です。サビキとかシャブキと呼ばれています。各漁師が貝や骨、珊瑚などさまざまな材料で手作りしていました。

擬餌鉤（ぎじばり）

県内でホロと呼ばれる擬餌鉤です。長い釣糸の先にこれをつけ、船で曳いて餌のようにみせ、カツオ、ブリ、サワラ、シイラなどを釣るホロ曳漁で使われます。

枕箱（まくらばこ）

漁師が漁道具を入れて持ち運ぶ道具箱です。漁の途中で休むときに枕として使っていたことが名前の由来と言われます。天草市の牛深ではカルタと呼ばれていました。

8　展示資料一覧

（法量の単位：cm）

1 台所今昔

展示資料名	主な県内での呼び名	使用地	法量（縦×横×高さ）	備考（使用年代等）
羽釜	ハガマ	八代市鏡町上鏡	22.5×22.5×15.3	
火吹き竹	ヒオコシダケ　フユジダケ	熊本県内	3×3×61	
渋うちわ	シブウチワ　ウチワ	八代市鏡町上鏡	32.5×27×0.8	
七輪	シチリン	山鹿市鹿央町持松	26×26×23	
弦鍋	エナベ	玉名市横島町横島	33×36.5×40	昭和20～30年代
焙烙	ホウロク　ホウラク	熊本市池田町	35.5×35.5×5.5k	
自在鉤	ジザイカギ　ジゼカギ	球磨郡水上村湯山	5×32.5×97.5	
飯櫃	オヒツ、メシビツ	玉名市天水町部田見	27×27×15.5	昭和初期
飯櫃入れ	メシビツイレ、ヒツムロ	玉名市天水町部田見	34.5×34.5×23.5	昭和初期
飯籠	ツリショウケ　カケジョウケ　エッケジョウケ	玉名市横島町横島	40×40×30	大正後期～昭和30年代
保温ジャー	ジャー	玉名郡和水町江田	23×29×３３	
電気炊飯器	スイハンキ	玉名郡和水町江田	31×37×28．5	
箱膳	ハコゼン	八代市	28×28×17	
膳	ソウワゼン	八代市鏡町上鏡	36×36×21 33×33×21 30×30×21	
ちゃぶ台			72×72×28	
弁当箱	メンツ　ワリゴ	阿蘇市波野	20×11.5×80	明治期～大正期
弁当箱	メシツギ　メシオケ	上益城郡益城町小谷	14.6×22.7×16.8	明治期～昭和期
水筒	タカンポ　ヨギリ	球磨郡球磨村神瀬	9.5×9.5×30	昭和20年～昭和25年
水樽	ユダル　ミズタゴ	宇城市豊野町糸石	21.5×21.5×35.5	
提重箱	ワルゴ、サジキベントウ、ジュウニンベントウ	玉名市岱明町開田	17.5×26.3×39.5	大正13年～
石臼	イシウス	阿蘇郡西原村小森	52×26×29	明治～大正まで
豆腐箱	トウフバコ	山鹿市鹿北町芋生	43.7×34×20	明治～昭和中期まで
甕	カメ	熊本県内	58×58×80	
醤油籠	ショユスノコ、ショウユメゴ、ショイカゴ	上益城郡山都町鎌野	28×28×66	明治期～
醤油攪拌棒	ショウユカキ、マゼボウ	阿蘇市三久保	16×12×75	大正期
醤油絞り器	ショウユシボリフネ、	玉名郡南関町関下	69.5×52×32	大正～昭和期
醤油甕	ショウユツボ、ショウユガメ	山鹿市鹿央町合里	34×35×38.5	明治～昭和初期まで
鰹節削り	カツオブシケズリ	天草市牛深町	34×17×12	
弁慶	ハザシ　クシサシ	上益城郡御船町滝尾	6.5×6.5×56	

2 もっと暖かく もっと明るく

展示資料名	主な県内での呼び名	使用地	法量（縦×横×高さ）	備考（使用年代等）
火鉢	ヒバチ	熊本県内	46×46×29	
炭入れ	スミタゴ	玉名市横島町横島	23.5×30×40	大正初期～昭和30年頃
十能	ジュウノウ	八代市鏡町上鏡	15.5×21.5×53	
火消し壺	ヒケシツボ	山鹿市鹿央町持松	25.5×25.5×21.5	
炬燵（櫓・火鉢）	コタツ、カカエコタツ	山鹿市志々岐	櫓38.5×38.5×31.5	明治期～昭和20年頃
行火	コタツ、アンカ	熊本市大江	13.3×22×16.8	

展示資料名	主な県内での呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
湯湯婆	ユタンポ	八代市鏡町上鏡	30×22.5×11	ブリキ製
湯湯婆	ユタンポ	熊本市大江	25.8×10×12	陶器製
電気行火	アンカ	熊本市近見	25×12×3.5	昭和33年～
ひで鉢	ヒタキイシ、トボシ	阿蘇郡西原村小森	17.5×18.5×23.5	明治期
燭台	ロウソクタテ	八代市鏡町上鏡	22.5×22.5×74	
行灯	アンドン	八代市鏡町上鏡	29×29×93	
提灯	コトボシ、アンドン	葦北郡津奈木町岩城	19.2×19.2×43.8	昭和25年頃まで
提灯	ユミハリチョウチ	天草市牛深町牛深	25×25×48	
強盗	ガンドウ	八代市鏡町上鏡	24×24×34	
電灯		山鹿市菊鹿町	23×23×13	昭和30年代まで

3 洗濯と裁縫

展示資料名	主な県内での呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
井戸の滑車	クルマキ、ミズアゲカッシャ	熊本市梶尾町	34×33.5×91	墨書「昭和貳拾六年九月　辻増平作」
釣瓶桶	ツルベオケ	阿蘇市西町	22×24×21	昭和18年～昭和25年
洗濯板	センタクイタ	熊本市稗田町	53.3×27×1.6	
伸子針	シンシバリ、シン	熊本市大江	直径1mm程度、長さ約40cm	
洗濯機	センタッキ	広島県庄原市	41×48×90.5	昭和33年製
裁縫箱	サイホウバコ	熊本市大江	19.6×32×26	明治期
へら台		宮崎県日南市	38.5×171×4	
物差し	クジラジャク	熊本市大江	1.8×37.8×2	
絎け台	クケダイ	宇土市古城町	52×4×50.5	昭和期
足踏みミシン	ミシン	熊本市新大江	44×121×78	シンガー社製
火熨斗	ヒノシ　ユノシ	熊本市和泉町	11.7×37×7.8	明治末～大正期
焼鏝	ヤキゴテ、ノシゴテ	八代市出町	35×3.1×3	昭和30年代まで使用
霧吹き		熊本市近見	13.5×7×4	昭和32年～
炭火アイロン	ヒノシ、アイロン	玉名郡和水町江田	17×9.5×17.3	大正～昭和初期
電気アイロン	アイロン	熊本市琴平本町	19.8×10.3×12	ナショナル電気アイロン。箱書き「昭和参拾七年」
宮参りの着物	ミヤマイリギモノ	八代市	身丈66　桁42	
仕事着	シゴトギ　ハンギリ	玉名市横島町横島	身丈86　桁67	
ドンザ	ドンザ	天草市五和町二江	身丈130　桁60	大正5年～大正期
麻の着物	アサノフク	球磨郡球磨村神瀬	身丈84　桁62	昭和25年頃まで
男性用外套	トンビマント　マント	阿蘇郡高森町	身丈133　全幅135.5	
蓑	ミノ、カヤミノ	宇城市小川町南小川	97×70×5	

4 着るものをつくる

展示資料名	主な県内での呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
桑切鎌	クワガマ、クワキリガマ	合志市竹迫	47×10.5×2.5	
桑爪	クワツミツメ、クワツメ	宇城市松橋町萩尾	3×3.6×2	昭和20年～昭和47年
桑扱器	クワノハモギリ、クワスゴキ、クワコキダイ	玉名市伊倉北方	72×39×60	大正7年～昭和30年
桑籠	クワカゴ	天草市新和町大宮地	47×47×56	大正末期～昭和初期
桑切鋏	クワハサミ	玉名市伊倉北方	65.5×32×3	大正5年～昭和40年頃
催青枠	サイセイワク	玉名郡和水町	27.3×112×38	
稚蚕飼育箱	チザンシイクカン	上益城郡嘉島町井寺	57×57×14	昭和期

展示資料名	主な県内での呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
桑切包丁	クワキリホウチョウ	球磨郡あさぎり町須恵	7×36×3	大正～昭和59年
蚕籠	マルバラ	球磨郡錦町西	89×89×2,5	大正～昭和20年頃
蚕籠	バラ	上天草市姫戸町二間戸	61×91×4,5	昭和5年頃～昭和20年
蚕籠	バラ	上益城郡山都町市野原	80×90×4	昭和11年～昭和58年
蚕籠	カイコバラ	下益城郡美里町三加	65×96×3,8	昭和5年～昭和20年
蚕籠	シイクバコ	宇城市豊野町上郷	80×100×2,5	戦後しばらく
蚕籠	グンゼバラ	山鹿市鹿本町梶尾	84×98×3	昭和10年～昭和20年
給桑台	キュウソウダイ	阿蘇郡西原村河原	65×57×78	大正～昭和初期
給桑籠	クワフルイ	山鹿市鹿本町中富	22×22×11	昭和10年～昭和25年
蚕網	シチトウアミ	上益城郡嘉島町井寺	50×83×1	大正～昭和
蚕網編	シットアミ	玉名市岱明町野口	61×91×2.5	昭和10年代
藁蔟	マブシ		26×15×10	
改良蔟	マブシ	玉名郡和水町萩原	55×80×7	
紙蔟	カミマブシ	玉名郡和水町原口	39.5×54.4×3	
回転蔟枠	カイテンマブシ	宇城市小川町南小川	75×75×150	昭和期
蔟折機(手折り)	マブシオリ	上益城郡嘉島町井寺	56×12.7×20	明治期～大正期
蔟折機(器械折り)	マブシマゲ、マブシオリ	菊池市旭志麓	29×65×80	大正後期～昭和初期
改良蔟編み	マブシカケ、マブシキ	宇城市豊野町糸石	28×99×26	昭和2年～
毛羽取り	マユクリ、ケバトリキ	玉名郡和水町江田	100×54×44.5	昭和11年～
繭糸取り道具(七輪)	コシキ	玉名郡南関町関外目	29.5×29.5×25,5	明治
繭糸取り道具(土鍋)	イトトリナベ	上益城郡益城町田原	33×33×10	大正～昭和中期
繭糸取り道具(網杓子)	マユスクイ	上益城郡益城町田原	22.5×14.5×0.5	大正～昭和中期
繭糸取り道具(口立箒)	マゼルモノ	上益城郡益城町田原	23×4×2.5	大正～昭和中期
繭糸取り道具(集緒器？)	タケ	上益城郡益城町田原	3×3.5×13	大正～昭和中期
座繰	ザグリ	天草市有明町下津浦	16×47×40	明治35年～昭和30年代
牛首	イトクリ	上益城郡山都町鎌野	52×28×44	明治期～大正期
糸車	イトグルマ、ヨリグルマ	玉名郡長洲町	55×93×83	明治30年代～昭和40年頃
真綿枠	マワタツクリキ	合志市竹迫	65×29×2	？
真綿		山鹿市		
綿打弓	ワタウチキ	天草市栖本町	160×30×3	江戸期？～昭和期
実繰	ワタクリキ、サネクリ	球磨郡山江村山田	51.5×30×28	昭和10年頃
綜割		菊池郡大津町室	44×43×54	昭和14年～
機	ハタオリキ	天草市有明町下津浦	1680×910×1560	大正～昭和20年代
肥後絣縞帳		熊本市川尻		熊本伝統工芸館所蔵

5　田畑で働く

展示資料名	県内での主な呼び名	使用地	法量(縦×横×高さ)	備考(使用年代等)
鍬	ヒゴグワ　イタグワ	八代郡氷川町網道	48×13×51	明治～昭和初期
鍬	サンボングワ	熊本市近見	37×16.5×107	昭和20年代から
鋤	スキ、ヒキテスキ	熊本県内	173×27×75	

展示資料名	県内での主な呼び名	使用地	法量（縦×横×高さ）	備考(使用年代等)
二段耕犂	スキ	熊本市海路口町	115×156×110	大正～昭和　熊本市の東洋社製　日の本号
馬鍬	マガ	菊池郡菊陽町辛川	40×86×78	～昭和40年頃
塊割	クレワリ、クレシャギ	阿蘇郡西原村小森	26×6×89	大正時代
田下駄	タゲタ、アシダ	阿蘇市三久保	24×17×3	昭和初期～昭和30年頃
踏車	ミズグルマ、スイシャ	宇城市三角町戸馳	200×51×158	
田植え綱	タウエヅナ	山鹿市菊鹿町木野	20×7×45	
田植え定規	タウエジョウギ、タウエヨウワク、スジトリ	荒尾市大島	74×55×3	
肥桶	コエタゴ	上益城郡益城町田原	37×37×83	昭和初期～昭和30年代
雁爪	ガンヅメ	八代市東陽町河俣	21．5×14×13	大正時代
田打ち車	オシガンズメ	山鹿市鹿北町芋生	130×45.5×71	昭和31年から
油差し	アブラサシ	上益城郡嘉島町上仲間	9×9×45	大正～昭和初期
蚊火	ヒヅト	菊池市重味	44.5×3.5×3.5	昭和56年製作
鋸鎌	ノコガマ、イネカリガマ	玉名郡玉東町上木葉	33×13×2.5	昭和初期
鎌	カマ、コガマ	上益城郡山都町上寺	41×29×2.3	昭和初期～昭和30年代
千歯扱	センバ	玉名市伊倉北方	85×60×63	昭和初期～昭和25年
足踏脱穀機	アシフミダッコクキ、アシフミセンバ	宇城市豊野町下郷	72×67×65	昭和初期～昭和20年代　愛知県豊川町共栄社製
唐棹	ブリコ、ビャー、メグリボウ	宇城市松橋町北萩尾	185×15×4	昭和初期
鬼歯	オニバ、オンバ	天草市宮地岳町	134×23×16	昭和初期～
箕	ミ	熊本市河内町河内	65.5×73×15.5	
唐箕	トウミ	熊本市護藤町	49×104×115	
柄振	モミアセリ、モミカキ、シロオシ	上益城郡嘉島町上仲間	140×40×12	
篩	モミオロシ、トオシ、フルイ	玉名市天水町小天	56×56×11	昭和20年代
万石通	マンゴク	上益城郡益城町田原	84.3×53×125	大正7年～昭和20年代

6 山で働く

展示資料名	県内での主な呼び名	使用地	法量（縦×横×高さ）	備考(使用年代等)
切斧	チュウノー　オノ	菊池郡大津町高尾野	76×19.5×2.5	大正時代　刃に「佐上　明光」と刻印
山鋸	ノコ、ヒッキリノコ　タマキリノコ	菊池郡大津町高尾野	85.5×22×4.5	大正時代　刃に「登録商標　片吉謹製」と刻印
改良歯鋸	カイリョウバノコ、キリコミバノコ	球磨郡五木村平瀬	98×20×4	～昭和39年　刃に「片秀」と刻印
矢	ヤ	阿蘇市西湯浦	30×6×5	大正～昭和
鉈	ナタ	熊本県内	16.5×62×1.5	
鐶	クワン、ダシガン、ヤマダシガン	宇土市下網田	33×8.5×3	昭和20年代～昭和30年代
鉤	ツル	球磨郡球磨村神瀬	156×33.5×3	昭和20年代
鳶口	トビグチ	熊本市和泉町	66×9×2.2	明治～昭和
万力爪	マンリキ	上天草市松島町教良木	40×16.5×14	大正から昭和30年代
皮剥	カワハギ、カワコサギ	山鹿市鹿北町椎持	74×13.5×4.5	大正から昭和

展示資料名	県内での主な呼び名	使用地	法量（縦×横×高さ）	備考(使用年代等)
皮剥	キノカワムキ	阿蘇市西湯浦	33.5×3×2	大正時代
削斧	ハツリヨキ、ヨッキ	宇城市豊野町山崎	155×21×3.5	
大鋸	ワキノコ、コビキノコ	球磨郡五木村栗鶴	84×59×4.5	
手斧	チョウナ	阿蘇市西湯浦	57×10×22	大正から昭和
鎌	カマ、シタカリカマ、シタバレガマ	水俣市中鶴	60×27×3	昭和初期～
造林鎌	ゾウリンガマ	天草市宮地岳町	141×14×3.5	

7 海や川で働く

展示資料名	県内での主な呼び名	使用地	法量（縦×横×高さ）	備考(使用年代等)
魚伏籠	ウザ、サカナカゴ	玉名市天水町野部田	59×58×114	昭和初期
筌	ガネテボ	水俣市中鶴	42×42×36.5	
筌	ウナギテボ	玉名郡和泉町用木	12×12×59	昭和
鰻掻	ウナギカキ	宇城市不知火町松合	173×29×2	明治～
やす	ホコ	熊本市富合町田尻	139×5×2.5	
鋤簾	ヨイショ、アサリホリキ	熊本市畠口町	48×58×144	
サデ網	タビ、オシ	玉名郡和水町江田	70×95×85	
魚籠	ビキ、テボ	宇城市松橋町萩尾	27×27×25.5	昭和20年～
糸巻	タノマキ、イトマキ	玉名郡長洲町上松原	24.5×15.5×4	昭和22年～昭和40年
蛸壺	タコツボ	天草市牛深町	17×17×23	
擬餌鉤	サビキ、シャブキ	天草市牛深町	12×3×1.5	昭和10年代
擬餌鉤	ホロ	天草市牛深町	13×5×2.5	昭和10年代
餌木	エギ、ツイカトリ	天草市魚貫町	20×9×4.5	明治～
枕箱	マクラバコ、カルタ	天草市牛深町	25×15×15	昭和10年～昭和40年頃

[文化企画課松橋収蔵庫のご案内]

所在地：宇城市松橋町豊福1695
電　話：（０９６４）３４－３３０１
Ｆａｘ：（０９６４）３４－３３０２

平成23年度文化企画課松橋収蔵庫第２回企画展
「ちょっと昔のくらし探検　Ⅳ」

編集・発行　熊本県企画振興部地域・文化振興局文化企画課
熊本市水前寺６－１８－１
TEL(096)333-2155

発 行 日　　平成２３年９月１２日